



羅針盤



外川 八英
Yahei Togawa

千葉大学大学院医学研究院皮膚科学 助教

ダーモスコピー診療の基本と最新情報をこの1冊に！

2018年6月の第117回皮膚科学会総会(広島)の折、本誌の編集委員長である大原國章先生が私に声をかけて下さった。今回本誌においてダーモスコピーの特集が2012年5月号以来、ちょうど7年ぶりに組まれることになり、どういふ巡り合わせか私に編集責任者の白羽の矢が立ったとのことであった。

思えば、ダーモスコピーは2006年4月に保険適応となってから久しいが、2018年4月より対象となる皮膚腫瘍の経過観察の目的で行った場合にも4カ月に1回に限り算定することが可能となったばかりである。これによって、積極的にダーモスコピーによる定期的な病変の観察ができるようになった。

ここ数年のトピックとしては、2015年の第4回World Congress of Dermoscopyにて、一般に用いられてきたダーモスコピーの比喩的表記に加え、ウィーン医科大学教授のHarald Kittler先生が中心となって考案した、シンプルな記述的表記についても使用が標準化された。例えば比喩的表現の色素ネットワーク(pigment network)という言葉は私たちにメラノサイト病変を想起させがちであるが、実際には皮膚線維腫や老人性色素斑においても色素ネットワークがみられることがある。この場合、皮膚線維腫であれば繊細色素ネットワーク(delicate pigment network)、老人性色素斑ではネットワーク状構造(network-like structures)と呼び名が変わったりする。これに対し、記述的表記ではこれらの構造はいずれも網状線(lines, reticular)と表現されるた

め、同じ構造であっても疾患によって違った言葉を用いなくてよいという利点がある。

本特集号はここからヒントを得て、まず総論では、診断の基本となる2段階診断法の図説的な解説を行い、記述的表記の対応表も掲載することで、診療およびカルテ記載のハンドブックとして使用できるように心がけた。

次にPart 1では、前述のように、異なる疾患においても同じ構造所見がみられる場合があることから、東京女子医科大学東医療センター教授の田中勝先生ほかエキスパートの先生方に、同じ構造を持つ各疾患についての解説をお願いした。

さらに、Part 2では腫瘍の“似たもの同士”に焦点を当てた。まず一番目に大原先生の御厚意で提供していただいた眼瞼部の腫瘍について、そして二番目は、われわれ皮膚科医師を悩ませる無色素性病変について、千葉大学病院皮膚科の若手の医師とともに、鑑別するうえでの注意点を考察した。

そして、Frontlineのコーナーでは、カシオ計算機株式会社より、現在行っている新しいダーモカメラ・画像管理ソフト・診断サポートアルゴリズムの開発への取り組みをご紹介いただき、巻末に、当科におけるダーモスコピー診療体制について、当科教授の松江弘之先生に簡潔にまとめていただいた。

末筆ながら本特集号が諸先生方の日頃の疑問点を少しでも解決し、ダーモスコピー診療の一助となれば幸いです。